

エチオピアのセクシュアリティ断片 —ミンミという少女のこと—

田川 玄

ミンミと呼ばれる少女がいた。本当の名前は知らない。ただ、ミンミとだけ呼ばれていた。目鼻立ちの整った顔は小さく、大きな黒い瞳が涼しげに見えた。エチオピアでは、ときどき見かける美人顔だ。背は低いがコロコロとした体つきで服がはちきれんばかりであった。笑うと子供っぽい顔立ちになる、気立てのよい十九歳の女の子がミンミだった。

ミンミはブンナ・ベットで働いていた。エチオピアの公用語のアムハラ語で、ブンナはコーヒー、ベットは家を意味する。直訳すれば、ブンナ・ベットはコーヒーハウス。昼間は名前の通りに、コーヒーや紅茶、コーラなどの清涼飲料を出す喫茶店である。エチオピアのどんな田舎町にも必ず軒はあるだろう。壁にはしばしば派手だが稚拙なペンキ画が描かれている。画のモチーフは陳腐にも、ヨーロッパらしき湖と山並みの風景だったり、野生動物だったりする。電気の通っている町ならば、イタリア製のエスプレッソマシーンがこれ見よがしにカウンターに置いてある。この機械は、なぜか大抵男の店員が扱っている。薄っぺらい上張りを着た店員は得意げに機械から伸びている細長い金属の管から、シュコッという音と共に蒸気を吹き出させ、コーヒーや紅茶を泡立たせる。濃厚なエスプレッソが小さなコーヒー茶碗に入れて出される。ガラス製のカップなら、上澄み1センチほどの薄茶色の泡と、1センチほど底に沈殿している灰色の砂糖の間に、漆黒の液体が透けて見える。ミルク入りを頼めば、この三層に真っ白なミルクの層が加わり、スプーンでかき回すのが勿体無いほどのコントラストとなる。エスプレッソの苦みが、食事後の口の中に張り

付いたエチオピア料理独特の脂を洗い流す。

コーヒーハウスは単なる喫茶店ではない。夜になると酒場になる。カウンターの奥にジンやウィスキーのボトルが並び、電気があれば冷蔵庫にビールが冷えている。コーヒーハウスのウェイトレスは酒場の女だ。スピーカーからはエチオピアの歌謡曲が大音量で流れる。うるさいこと、この上ない。スピーカーの近くでは、声を張り上げないと話ができない。いい加減に疲れてくる。こうした喧騒のなかで、女たちは注文を取り、ビールを運ぶ。そして、客の横に座り、お相伴に預かる。おしゃべりをする。色目を使う。ときには、商売の交渉をする。商売とは売春のこと。コーヒーハウスのウェイトレスは娼婦なのだ。

コーヒーハウスは連れ込み宿を兼ねている。酒場で交渉のまとまった女を他の場所に連れ出してもよいが、そのままコーヒーハウスの部屋で抱くこともある。あるいは、宿に泊った客がついでにその宿の酒場で女を買うことも多い。地方では、宿屋といえどどこでもこうしたものである。

店の後ろに同じ造りの部屋がいくつも並んでいる。セメントの壁にそのままペンキを塗っただけの殺風景な四角い部屋に、裸電球がぶら下がっている。発電機からの電圧は不安定で、明るくなったり暗くなったりとはなはだ落ち着かない。ベッドは必ずダブルサイズ。これに小さな机と椅子があればいい方だ。机の端には、ろうそくの燃え滓が幾重にもなり、こびりついている。机や椅子はなくても、水入れと洗面器に似たプラスチックの尿桶はある。売春宿の必需品だ。その部屋に前夜商売女が泊ったか

どうかは、翌朝遅くに寝ぼけ顔をした女が大儀そうに部屋から現れるのを見なくとも、尿桶を見れば分かる。局所を洗った汚れ水と尿とで溢れ出しそうである。

ウェイトレスの日当は驚くほど僅かだ。体を売らないと生活していけない。彼女たちの多くは、何か訳があり故郷にいられなくなった女性である。体を売りながら、町々を渡り歩く。コーヒーハウスのウェイトレスの入れ替わりは激しく、二、三カ月もたつと顔ぶれが、がらりと変わっている。そして、200キロも離れた別の町のコーヒーハウスで、ばったり会う。「あんた、どここのコーヒーハウスにいたでしょう」「いたよ。お前も見ただことがあるなあ。なんでこっちに来たの?」「あそこにはビジネスがないからねえ。娼婦たちは売春のことを英語そのまま「ビジネス」と呼ぶ。彼女たちはトラックに同乗させてもらい移動する。トラックは街道を走りつづけ町から町へと商品を運ぶ。ドライバーは町でコーヒーハウスに泊り酒をのみ、時々は女を買う。女は町で体を売るが、実入りが悪くなると商売を求めてトラックに乗せてもらい次の町へと移動する。ビジネスのあるところ、女も商品もトラックもドライバーも一緒に町々を回る。

ミンミもそうした娼婦のひとりだった。彼女は、一時期わたしが常宿としていたコーヒーハウスのウェイトレスで、わたしに気がある素振りを何度となく見せていた。ある日、彼女はわたしに向かっていった。「あなたが好きだ」「あなたを好きではない」とわたしは答えた。彼女はわたしの理解できる英語もオロモ語もほとんどできなかつた。わたしは、彼女の話すアムハラ語がほとんど理解できなかつた。わたしと彼女の間は、直接には幼稚な会話しか成り立たなかつた。そのとき、コーヒーハウス

には家畜を買い付けにきた商人の一団が長く滞在していた。そのなかで仲のよくなった獣医が、彼女とわたしの通訳をした。彼が言う。「彼女は君を愛しているんだ。お金はいらぬといっている。ただ、一緒に寝たいんだって。今晚にも訪ねるといっているよ」。

その獣医は、インテリにしては珍しく気のいい男であった。彼も例に漏れず、コーヒーハウスのウェイトレスとねんごろになった。アディス・アババに婚約者がいたが、彼はさびしくなり、ひとりのウェイトレスと一夜を過ごした。そのうち、彼は病気になる、彼女は献身的な看病をした。彼はわたしにいう。彼女のことを愛している。お金を払ったのは、はじめの晩だけだ。婚約者はどうするのと聞くと、それはそれで愛しているという。「浮気がばれたらどうなるの?」とわたしが尋ねると、彼の返事は「とんでもない。殺されちゃうよ」。もちろん、彼は婚約者とは結婚するつもりである。

またあるとき、夜に件のコーヒーハウスでコーヒーを飲んでいると、見知らぬ男がわたしの隣に座った。彼はつたない英語で話し掛けてきた。アディス・アババから出稼ぎに来ているトラックドライバーだった。彼の運転する中型トラックは、この町を起点に荷物と乗客を荷台に乗せて中距離を行き来する。わたしがここに来て二年あまりで、トラックの数は随分と増えた。ドライバーの需要もあるわけだ。稼ぎも首都にいるよりは、地方で仕事をするほうが随分といいらしい。彼はわたしに相談をもちかけた。「自分には恋人がいる。タイピストをしていたのだが、エジプトに出稼ぎに行ってしまった。そして、そのまま行方知れず。どうしたらいいのか。」近頃、エチオピアで問題となっているアラブへの女性の出稼ぎである。新聞にも取り上げられていた。

多くの女性がだまされて外国に渡り、ときには陵辱されて帰国さえできなくなっているらしい。彼は言う。「彼女をととてもとても愛している。淋しくて仕方がない。どうしたら連絡が取れるのだ。エジプトまで探しに行こうか、どうしようか。」そう言って恋人の写真を見せてくれた。話は続く。「自分はあまりに淋しいから、ここで情婦をこさえた。その女を愛している。ついては、君も一人だ。どの女がいいか。どれかを選び給え。心配いらぬ。おれのおごりだ。」

彼らの物言いかからすると、ある女を愛しつつも別の女を愛することは、ごく自然のことである。だから、たとえわたしが日本に婚約者がいるといっても、それは女性を拒絶する理由にはならない。ミンミも獣医も宿の人々もトラックドライバーも、わたしのかたくなな拒絶は不思議であるようだった。

あるとき、ミンミは自分の身の上話を話した。彼女は、ある地方都市で生まれ育った。彼女が高校生のときひとりの男と知り合った。その男は、自転車でアフリカを縦断しているイギリス人だった。彼と彼女は恋仲になった。彼女にとって彼は初めての男であった。妊娠し子供を産んだ。彼女は勘当され故郷の町を出て、コーヒーハウスの娼婦に身を落とした。子供は両親のもとにいる。彼女は、その男から来たという手紙と写真を見せてくれた。金髪の白人だった。優男に見えた。随分と昔の日付だったように思う。英語でスペインにいと書いてあった。スペインは寒くて天気が悪いと。この男は自分の子供がエチオピアにいるなどと夢想だにしないだろうし、ミンミが娼婦となっていることも知らないのだろう。しかし、彼女はいつか彼が迎えに来てくれると信じていた。ミンミは突然に立ち上がり部屋から出ていった。悲しくなって泣いていたのだろうか。

それからしばらくのあいだ、調査のためにわたしは町を離れて村に戻った。再び、町にやってきたときには、ミンミの姿はなかった。知り合いの娼婦を頼って国境の町へ向かったそうだ。宿の者が言う。「ここじゃ、ビジネスがないからねえ」。国境の町は交易の要。ここよりビジネスがある。ミンミがいなくなって、少し淋しい気がした。

ある日、暇つぶしに馴染みの写真屋に出かけた。写真屋は、最近撮った写真を見せてくれた。そのなかの一枚に、筋骨たくましい金髪でひげを生やした白人男が、ミンミとべったりと腕を組んで写っていた。写真屋の話によれば、その男はドイツ人の二人組の片割れで、彼らは自転車で国境を越えてナイロビまで行くという。腕を組んでいる男と、ミンミはねんごろであったと、写真屋は笑う。ミンミがすでに町にいないことを、写真屋は知っているのだろうかと思ったが、何も言わずにわたしは宿に帰った。前払いなのだから写真屋は損をしない。写真は引き取り手もなくやがて見本として店先に飾られた。店の前を通るたびにミンミがべったりと白人の男に身を寄せている写真が目に入った。まさか、国境の町までそのドイツ人を追っていったのではなからうな。いつしか写真は剥がされ、引き取り手のない他の写真とともに、カウンターの引き出しに抛り込まれた。

ミンミが旅立ったという国境の町に行くことがあれば訪ねようと思い、彼女の頼っていったコーヒーハウスの名前を聞いた。宿の者は、どこどこと教えてくれた。結局その町に行くこともなければ、コーヒーハウスの名前もそのうち忘れてしまった。

(たがわ げん 一橋大学大学院
社会学研究科)